

現代における保育者の専門性に関する一考察 (3)

A Study on Expertise in Current Preschool Teaching (3)

草 信 和 世
(こども学科 専任講師)

要旨 現代の子どもの育ちを援助し、現代の保護者を助けうる保育者の専門性を明らかにするために、子どもと保育者の共通の心理的基盤を構築しうる保育行為の間主観的参与観察を、子どもと保育者とが一对一、もしくは複数対一でかかっている場面に着目し行なった。その結果、共振という身体行為が、現代の子どもの心理的基盤の構築を可能とし、彼らの求めを満たしうる保育行為であること、そしてその保育行為は「からだの形で共振する」「からだのリズムと動きで共振する」という身体知の特質を持つことがわかった。

これらの特質を発揮する保育行為は、現代の子どもの保育ニーズを満たし、家庭の養育を下支えするという意味で、現代の保護者を助けうる現代の保育者の専門性の現われであると考えられる。

【キーワード：保育者 専門性 身体知】

I はじめに

「現代における保育者の専門性に関する一考察(2)」において、共振という身体行為が、現代の子どもの心理的基盤の構築を可能とし、彼らの求めを満たしうる保育行為であること、そしてその保育行為は「ことばのリズムで共振する」「からだの向きで共振する」という身体知の特質を持つことがわかった。本稿は、同様の観点より身体知の特質を更に分析し、現代における保育者の専門性のあり方の考察を深めることを目的とする。

II 方法

「現代における保育者の専門性に関する一考察

(2)」と同様の方法をとる。本稿においては、子どもと保育者とが一对一および複数対一でかかっている場面を取り上げる。

III 結果

観察結果より、「からだの形で共振する」「からだのリズムと動きで共振する」という特質が見出された。本稿はこれらの特質について検討する。

1 からだの形で共振する・

事例1 「自動車にのって、ゴーゴーゴー」

この事例は、「からだの形で共振する」という内容を示す保育実践である。子どもと保育者とが、複数対一でかかっている場面について検討する。

園庭にて、1歳児が足でこいで進む自動車や、手押し車、リヤカー、ボールを使って遊んでいる。車はほぼ一人につき一台が用意されている。子どもたちは思い思いに、走ったり運んだりして、広い範囲を動いている。

【1-A】

保育者D「あら、低いわ、これ。」保育者Dは、子ども用の自動車に乗っている。①保育者Dの背はいつもと比べてぐんと低く、背中は丸い。長い足を折り曲げ、力をこめて自動車をこぎ、前へ進んでいる。保育者Dはしばらくこいだ後、自動車に乗ったまま止まる。子どもAが自動車に乗って現われる。保育者Dは、子どもAがのっている自動車の後ろにぴったりと自分の自動車をくっつける。そして、②子どもAにつながったまま進んでいく。すると、子どもAの真正面に子どもHが自動車に乗りやってきて、③子どもAの自動車と向かい合わせにぴったりとくっつく。④3人はしばらく動かない。⑤子どもHが、ざっという土の音とともに、思い切ったように自動車の向きを変え走り出すと、子どもAもほとんど同時に前進し始める。保育者Dは、そんな子どもAの自動車に、ぴったりとくっついて前進していく。が、子どもAの自動車の進むスピードは速く、

⑥保育者Dはその場に残されてしまう。子どもAの自動車との距離が生まれるが、子どもAは気にすることなく前進する。⑦保育者Dはゆっくりと走り続ける。すると、子どもRが自動車に乗りやって来て、保育者Dの正面に現れる。そして、向かい合って保育者Dの自動車にぶつかってくる。⑧二人はそのまましばらく、くっついている。

自動車に乗っている子どもの姿勢と保育者Dの姿勢が重なる(①)。保育者Dは子どもと同形のからだを現わし、子どもの世界に自ら入っていく。保育者Dは、自動車に子どもと同じ様に座るとき、自動車を自分のからだの一部分と感じる子どもの感覚を得ている。自動車で子どもの自動車とくっつくとき(②)(③)(④)(⑧)、自分のから

だと子どものからだがかくつき、抱き合うような感覚を味わっていると思われる。子どもAが我に返って方向を変える時は一種の決別であり(⑤)、新しい志向に向けての出発であると言えよう。保育者Dは残されるが(⑥)、新しい出会いに開かれており、違う子どもとの出会いを志向している(⑦)。

【1-B】

保育者Kは乗っている子ども用自動車から降り、その自動車の後ろを押しながら走り始める。①ほとんど地面をはっているような姿勢である。が、はいはいとは違って、前が車なのでかなりのスピードを出すことができる。保育者K「行くよー。」と声をかけ、勢いよく走り始めると、②子どもLが同じように自動車を後ろから押して走ってくる。また、③自動車に乗っている子どもTも、そのまま猛然と地をけて疾走する。かなりのスピードが出ているが、子どもたちはまったく遅れをとらない。④手押し車を押ししていた子どもHは、三人の走行にはっとして、車を押しながら同じ方向に走り出す。保育者Kは、一度立ち止まり息を整えて、また自動車を押し走り出す。

保育者Kの姿勢は、はいはいの姿勢である。これは、普段大人が特に屋外でとることの少ない姿勢である。保育者Kは子どもの姿勢を自らとり、子どもとからだの形を重ねることで、子どもの世界へと入っていると思われる(①)。そのような保育者Kを感じ取り、受け取る子ども達の感度も良く、一瞬のうちに姿勢を、動きを、スピードを、重ね合わせていく(②)(③)(④)。

まず、保育者Dは、子どもAと同じからだの形になることで、子どもAと同じ場に降り、彼を感じるものと同じものを感じようという意志を持ち行為している。自動車に乗り座っているという状態は、自動車をからだの一部と化し、自動車を自分のからだの延長として感じられるという子どもAの世界を同様に感得していると思われる。それゆえに自動車にぶつかることは、身体接触と同

様の意味を持っているのである。このような身体感覚は保育者Dがあえて子どもAのからだと同じ形になることを通してもたらされており、子どもAは自分と同じように感じている保育者Dにぶつかりに行き、自分の世界を開示していくことができている。そして、保育者Dの乗る自動車に接触し、そこからエネルギーを得ている。十分なエネルギーを得た子どもAは、その証拠に、保育者Dからきっぱりとはなれていくのである。子どもRも子どもAと同様に保育者Dの自動車に接触することで安定していると思われる。

自動車を手で持ち、前かがみになって押すというからだの形及び動きは、大人のからだには相当の負荷がかかる。が、幼い子どもは当たり前に行っているからだの形であり動きである。子どものからだの形をあえて保育者Kが取り、その動きを促

進するという事は、子どもL、子どもTの「ここ」に保育者Kが飛び込み、彼らと同じ場に立ち、その行為を活性化させるということの意味している。その証拠に子どもL、子どもTは保育者Kの動きに促され、急激に自らの動きを活性化させ、充実した活動の始まりをつくる事ができているのである。

保育者Dおよび保育者Kは、子どもA、H、L、

Tとの共通の心理的基盤を構築し、子どもA、H、L、Tの求めるものを満たしていると言える。

2 からだのリズムと動きで共振する。……事例2「待て待てぐるぐるつかまえよう」

事例2は「からだのリズムと動きで共振する」という内容を示す保育実践である。ここでは、子どもと保育者とが一對一でかかわっている場面について検討する。

お天気の良い3月のある日、0、1歳児は、ピンクの帽子をかぶって、保育所に隣接する公園に出かけた。梨畑を通り、踏み切りをながめながら、ゆっくりと散歩をして公園に到着する。入り口から斜めに上がって、公園のなかへと入って行く。これはおなじみの散歩コースである。徒歩の子ども、ベビーカーに乗る子どもと、発達に応じてさまざまである。歩行がしっかりとできてきて、0歳児でも徒歩の子どもが増えてきている。公園のなかほどにある広々とした空間を使って遊ぶ。

【2-A】

①保育者Sは、大きく手を振り、ゆっくりとかけ足をしながら、保育者S「Lちゃん、Lちゃん—Lちゃんどこだ—。Lちゃん、どこだ—。Lちゃんだ—Lちゃんだ—。まて、まて—。Lちゃんだ—。」と言いながら子どもLを追いかける。②そして子どもLが、保育者Sに向ってくると、子どもLの方向に向き、③走ってくる子どもLを抱きとめる。子どもLをそのまま抱き上げて、保育者S「どう—」と声を出しながら、④子どもLの脇腹に手をかけて、ぐるりと空中ブランコのように子どもLのからだを回す。保育者Sのからだも一緒に大きく回転する。回転し終わって足が地面に付いた時、子どもLはふらつき1歩よろめく。そして、そこから子どもLがまた走り出す。⑤保育者Sは、子どもLが1歩よろめくところまでは前かがみになって、走り出すようにうでをかまえたままで、子どもLをじっとみている。⑥そして、子どもLが走り出すと同時に、保育者S「追いかける—。追いかける—。」と言いながら、追いかける。

身振りによる表現がゆっくり大きく行われ、保育者Sがからだで自分に向かっていること、また呼びかけのことばがくり返され、保育者Sがことばで自分に向かっていることが、子どもLに理解される。そして、彼に無理なく十分にそのことが受け入れられてから、ゆっくりと追いかけるという動作が始まるので、子どもLは追いかけるという動きを楽しむことができる(①)。そして、そのゆとりのある動きの中で、保育者Sに向かって行こうと自ら決めることができ、走る方向を変えていくと、保育者Sはその瞬間からその方向転換を受け入れたからだの構えを作る(②)。子どもLは、保育者Sのからだの変化から、自身の向

かっていく動きが受け入れられたのを察知し、思いきり飛び込んでいくことができている(③)。その動きを吸収しつつ、新しい回転の動きへとつないでいく。二人の動きが生み出されていき、二人は同じ動きをともに味わうひとときをもつ(④)。回転により軽い目まいが子どもLにおこる。保育者Sは、自分の動きをコントロールできない子どもLを見守りながら、自身の動きを止めて待つ。間をもちこたえながら、姿勢で次の遊びへと子どもLを誘う(⑤)。目まいから復帰した子どもLは、保育者Sの子どもLを追う姿勢から、保育者Sの意図をくみとり、保育者Sから逃げていくという動きを作り出す。その子どもLが動き出し

たタイミングをはずすことなく、ことばで活動内容を表現し、からだで追うという動きを作り出していく (⑥)。

まず、保育者Sが子どもLの動きのイメージを浮かべながら、ゆっくりとした向かう動きを作り、それを子どもLに示す。子どもLはそれを受けて、逃げる動きを作る。次いで、子どもLが向かう動きを作ると、保育者Sが受け止める動きを作る。ここには、押したり引いたり波のような動きによる呼応がある。そして、ともに回転するという同じ動きをして、ここで二人は同化する体験をする。次に、再び保育者Sが向かう動きを子どもLに示し、子どもLがそれを受けて逃げる動きを作り出す。その際、二人ともが身振り、姿勢を表現

として使用し、双方の思いの読みとりに役立てていると思われる。保育者Sのことばは、場にあるからだのリズムと動きを、音と意味の両面から表現し、さらに場を活性化させている。子どもLと保育者S双方がからだの動きのタイミングを十分に感得しており、活動全体にからだのリズムによる共振が見られる。

子どもLは自分の走るという活動を、保育者Sがともにし多彩な方法で豊かに展開することに喜び、活動を楽しんでいる。保育者Sは子どもLとの共通の心理的基盤を構築し、子どもLの活動を支え、豊かにして、子どもLの求めるものを満たしていると言える。

【2-B】

保育者Sは、子どもYと2人で歩いている。①保育者Sの歩幅は、子どもYの歩幅とほぼ同じ長さであり、同じリズムの足取りである。随分小またであり、普段の大人の歩幅と比べるとかなり小さい。子どもYはピンクの体操帽子のゴムの部分を左手にもち、体操帽子をゆらゆらとぶら下げながら歩いている。保育者S「Yちゃんの足元。」と言いながら、②保育者Sは子どもYの足元とその周りを指さして行く。子どもYは頭を傾けて下を見始める。③保育者S「〇〇あったかな？〇〇あったかな？」と歌うように繰り返しながら、また捜し続ける。子どもYは時々目をこすりながらでついて歩いている。保育者Sは足元を注視している。保育者S「あるよ。Yちゃん、見てる？」と保育者Sは、地面を指差す。④二人は同じ軌跡を描いて、丸く弧を描きながら隣合って動いていく。子どもYは目をこすりながら、地面のほうを見ている。⑤保育者Sと、子どもYの顔の傾きがそろってくる。保育者Sは地面を指差しながら、丸くからだにそって手を動かす。子どもYがその場にすっとうづくまる。⑥すると、保育者Sも同時にぴたりと立ち止まり、その姿勢のまま子どもYを見る。子どもYが何かを拾う。

二人の歩幅はそろい、同じ歩調で歩いている (①)。その軌道は重なり、双方がとなり合っただけで同じ場所を移動し続けている。同じスピードであり、また視線の方向もそろっている (②)。いっしょに同じリズムで、同じ姿勢で、同じ動きをしているのである (④) (⑤)。保育者Sのことばは二人が動いているリズムと共振し、歌うようなメロディも合わせもって、二人の動きを活性化し続けていくことを下支えしている (③)。捜し物という忍耐と根気のいる作業を、同じからだですること協同化している (④) (⑤)。子どもYが気づ

き立ち止まると同時に保育者Sが立ち止まる。二人ともが予期せぬ事態に即応してからだの動きを同期させることから、からだの共振が十二分に行われ、行動の協同化がなされていると見て取ることができる (⑥)。

子どもYは足元に散在するちいさなものを見つけたかと思っただけで、行動にその思いを結びつけられずにいる。保育者Sは子どもYにつきそうようにともに歩き、子どもYの志向する方向に目を向け、指差すことでその方向への注視を促したり、子どもの歩いたり止まったりする動きにリ

リズムを合わせて伴走することを通して、活動を支え続けている。そのため子どもYはその活動に取り組み続けることができ、探したいと思っていたものを見つけ出し、手に入れることが出来ているのである。この様に、保育者が子どもの気持ちに沿うとき、子どもと保育者のからだのリズム、姿勢、動きは共振し続ける。同じからだだが2つあるようにさえ見え、いっしょにいるという感じが強く表れて、強固な共通の心理的な場が形成されていることが周囲にも十分に伝わる。

保育者Sは子どもYと共通の心理的基盤を構築し、子どもYの求めるものを満たしていると言える。

IV 考察

本稿では、子どもと保育者の相互作用を捉え、保育者の暗黙知である身体知を記述して、その特質を分析することから、現代の保育者の専門性の現われを見出したいと考えた。またここでは一対一の関係を基本に、複数対一の関係へと広げ、検討を行った。

その結果、共振という身体行為が、現代の子どもの心理的基盤の構築を可能とし、彼らの求めを満たしうる保育行為であることが明らかになったと考える。では、この行為の中に、どのような専門性を見出すことができるのだろうか。

まず、「からだの形で共振する」という行為について述べる。「からだの形で共振する」という行為は、からだを同形化させていくことにより、からだのヴァイブレーションの深いレベルでの共鳴を生じさせる行為であると言えよう。それはからだの同形化が、子どもの実現したい活動を支えている様子からも伺うことができる。また、他の子どももこのからだの共振に乗りこみ、共振を増幅させることで、より強固な集団としての安定の基盤構築をなしている。ここには、からだの形に共振することで、子どものまた子どもたちの心理的基盤を構築するという専門性が現われていると言える。

次に「からだのリズムと動きで共振する」という行為について述べる。「からだのリズムと動きで共振する」という行為は、子どものからだのリズムと動きに保育者が入り、その動きとリズムを自らに表すことで、子どもとの共振を呼び起

こし、その後は、リズムと動きを同期させ続けることを通して、子どもを支えたり、より豊かなかわりを生み出す行為であると言えよう。子どもは、保育者とからだのリズムと動きの共振を継続することを通して、心の安定と、人とのかわりの豊かな彩りを経験することが出来ていると思われる。ここには、子どもにからだのリズムと動きで共振することを通して、子どもの心理的基盤を構築するという専門性が現われていると言える。

V 結論

現代の保育者の専門性として、「からだの形で共振する」「からだのリズムと動きで共振する」という身体知の特質が取り出された。これらの特質を発揮する保育行為は、現代の子どもの保育ニーズを満たし、家庭の養育を下支えするという意味で、現代の保護者を助けうる現代の保育者の専門性の現われであると考えられる。

本稿において、一対一の関係を基本とし、複数対一の関係へと広げ、その現われを見出すことが出来た。更に現代の保育者の専門性を表す特質について検討し、その内容を明らかにして、現代の子どもを育て、保護者を援助しうる、現代にふさわしい保育者養成への知見を更に得ていきたいと思う。

文献

- 垣内国光、東社協保育士会、保育者の現在、2007
 諏訪きぬ・村山祐一・逆井直紀、保育者のやり甲斐をささえる園内の諸条件、〔特集〕「父親・母親・保育者三万人の声」から見えてきた子育てと保育—新しい子育て支援のあり方を求めて、ミネルヴァ書房、2008
 田中未来、保育と専門性、全国社会福祉協議会、1980
 津守真、保育者の地平、ミネルヴァ書房、1997

謝辞

本論文作成にあたり、観察にご協力頂きました保育園のみなさまに、重ねて心より感謝申し上げます。